

「多様な動きをつくる運動」の促発指導に関する研究 —新体操のピボット指導教材化への試み—

大野久留美

A Phenomenological-Morphological Study on Coaching of “Essential Motions Leading to Various Movements” —Quest for Coaching Process of Pivot in Rhythmic Gymnastics—

Kurumi OHNO

I. 体づくり運動の現状と問題

文部科学省（2012）によると教科体育の一領域である「体づくり運動」は、ある一定の運動形態の習得をねらいとしていない¹⁾。このねらいは、指導現場にとって何を指導するのが分かりにくいことに繋がった。この問題に対応して、ねらいが周知され、様々な指導方法も開発された。

この状況のなか、2008年の学習指導要領では、「他の運動領域の準備運動や補強運動としての、単元の導入時などに少ない時間を帯のように位置づけるのではな^い」ということが義務づけられた²⁾。この変更理由は、「体づくり運動」のねらいをこれまで以上に達成するためのものであるという。それでは、どのように捉えれば、教育成果を上げられるのだろうか。ここで2008年の学習指導要領における「体づくり運動」の位置づけ、内容、取り扱いを整理して、教材づくりにおける問題性を示すことにしたい。

「体づくり運動」の学習内容は、他の運動領域と異なって「技能」とされているところが「運動」とされている。これは、子どもの日常的な運動活動からスポーツ技術の学習への“橋渡し”をするという系統的段階的学習の観点から考えられているのであろう。この考え方は、小学校第1学年から第4学年において「多様な動きをつくる運動（遊び）」が設定されているところにもみることができよう。

だが、指導現場では、この観点で指導がなされているだろうか。指導資料などの運動例を表面的になぞるだけの指導になってはいないだろうか。ここに本研究の問題意識がある。そこで、「多様

な動きをつくる運動（遊び）」の学習内容は、金子（2010）の「運動感覚能力」³⁾の視点を取り入れることを主張したい。

II. 「ピボット」の学習意義

本研究では、小学校学習指導要領解説（文部科学省、2008）に記されている「片足を軸にして、右回り・左回りに回る」⁴⁾に注目する。この運動は「よりよく」行うところに学習意義があると考え、新体操の「ピボット」を取り上げる。

金子（2010）によると、努力志向が「コツ」発生の前提となる⁵⁾。このことからよりよい「ピボット」を目指すなかで生まれるコツがあると考え、これを“軸感覚”と称した。「軸」は、工学的な意味で用いるのではなく、述語（運動感覚）的な意味を表し、仲間同士で共有できる「コツ」の内容をシンボリックに言語表現した比喩的な言葉である。

“軸感覚”は、体のバランス保持を必要とする様々なスポーツ運動において学習の対象とされる。特に、長軸回転のあるゴルフのスイングや陸上競技の円盤投げと類似すると言えよう。

また、「ピボット」の学習における自己観察内容の中心は、“軸感覚”に関わることである。それ故、“軸感覚”の高まりは、自己観察力の高まりを意味する。「ピボット」の習熟によって潜在化されていた“軸感覚”が顕在化し、さらに習熟すると、必要な時にだけ顕在化されると考えられる。「ピボット」の習熟によって“軸感覚”が養われ、自己観察力の高まりが期待される。

Ⅲ. 研究目的

本研究では、学習者の「ブラックボックス」のなか（運動感覚世界の中身）を解明することが指導の有効性を評価しうる資料になるという考えをとる。個に応じた適切な運動指導は、学習者の「思いや願いによる意志」⁶⁾を深く理解することが前提となろう（吉田ほか, 2010）。そして、指導者は、その運動の発達様相における学習者の“現在値”を判断した上で、指導する必要がある。そこで本研究は、「ピボット」を学習する過程における学習者の動感様相の変動を明らかにすることによって、「ピボット」指導のための情報提供を目的とする。

Ⅳ. 研究方法

「まぐれでできる段階」の被験者3名、「洗練してできる段階」の被験者1名に、筆者が個別指導を行う。金子（2005）の「代行分析」⁷⁾の方法を用いて、「ピボット」を学習する過程で変動する被験者の動感内容を分析する。考察資料は、被験者の学習の過程で撮影したビデオ映像と、これを元にして作図した連続図、被験者の内観報告、筆者が捉えた被験者の描写内容である。

被験者の自己観察及び内観報告の解釈のために、佐藤（1999）の「運動観察」⁸⁾の論考で示された感情的印象、原初的印象、分析的知覚、解釈図式の形成の4つに区分した自己観察内容を援用する。

被験者の動感（運動感覚の世界）を解釈するために、ヴァイツゼッカー（1975）の「相即」⁹⁾の理論を用いる。この理論では、知覚（感覚）と運動との関係は、運動によってある種の知覚（感覚）が生じるとともに、その種の知覚（感覚）を生じさせるように種々の運動をするという関係にあるとされている。この理論を援用して被験者のつまずきが解釈される。

Ⅴ. 「ピボット」の動感様相

1. 粗形態の位相における形相的特徴

被験者B 伸び上がるのが怖い

被験者Bは、大学入学時に新体操部に所属し、何度か試合に出場している。

指導実践における被験者Bが学習の当初に達成できた「ピボット」は、回転度数は半回転を越える程度であった。被験者Bは、「ピボット」を学習する過程で、胴の「ねじり動作」が現われるようになったのだが、右脚（軸脚）の「伸び上がり動作」が現れにくかった。踏み込む局面で支持足のかかたが浮き、伸び上がる局面で一気にかかたを上げられなかったのである。被験者Bは、筆者とのやりとりの中で「伸び上がるのが怖い」ことを話していたことから、被験者Bは、「伸び上がり動作」に“恐怖心”を抱いていたために、この動作が現れにくかったと考えられる。被験者Bがこの動作を改善するには、時間がかかったのだが、筆者が「脚出しピボット」の練習課題を提示したところ、この「ピボット」においては、回転角度を1回転半近く達成でき、踏み込む局面のかかたの浮きが無くなり、「伸び上がり動作」が改善された。そして、「ピボット」全体の力みが少なくなった。

2. つまずきの解釈と解決

(1) 動感の地平分析

被験者のつまずきを解釈するために、被験者の志向内容を分析する。志向内容には、顕在化された内容と潜在化された内容がある。顕在は意識的な操作を示すのに対して、潜在は意識下の操作を示す。顕在態と潜在態は、重層構造をなしており、潜在態が顕在化することもある。

(2) 被験者の“恐怖心”の解釈と解決

被験者Bが「ピボット」に対して「怖い」と思うことと形相的特徴にはどのような関係があるのか。まず、「怖い」の中身を深める。ヴァイツゼッカー（1975）の、「相即」⁹⁾の理論を元に、被験者の動感世界を探ることとする。「相即」とは、自己運動と周界との関係が保たれている情態とも言えよう。一方で、「相即」の関係が崩れる瞬間も存在

する。「相即」の崩壊は、「相即」を維持できていた状態（形式化されていた自己運動）から、一転して自己運動の先が読めなくなり、「相即」が崩れる状態（自己運動が無形式化した状態）になり、「わけがわからなくなる」¹⁰⁾という情態を示す（渡辺,1995）。さらに、この情態は、初めて挑戦する運動や慣れていない運動をする時にも起こり得る。「わけがわからなくなる」のは、やろうとする動きがいつでもそのようにできるわけではなく、予定外の動きになった時に、次の運動の展開が読めなくなる情態なのである。そして時に“恐怖感”を抱くのは、とっさに自己運動の形式化へ移行する見通しを立てられないことを暗に察知するからであると考えられる。そこで、“恐怖心”を取り除くには、「運動の先取り」¹¹⁾が必要とされる（マイネル,2002）。吉田ほか（2010）によると、「運動の先取り」は、「しつつ」ある時に次の動作を「探り」なしに「し始める」ことである¹²⁾。そして、マイネル（2002）によると、「運動の先取り」は、運動経験に左右される運動投企に影響される¹³⁾。

以上の理論を用いて、被験者Bの「伸び上がるのが怖い」を考察する。被験者Bの「ピボット」の特徴は、踏み込む局面におけるかかとの浮きであった。この特徴的な動作は、「伸び上がり動作」に“恐怖心”を抱いていたために現われたと推察される。そこで、回転の軸脚への体重移動動作の後に行う「伸び上がり動作」に力点を置いた「脚出しピボット」の練習課題によって、伸び上がった後に行う片足爪先支持の回転の運動投企が、以前よりもよりよく形成され、“恐怖心”も軽減され、回転角度数が大きくなったと考えられる。

VI. 結語と展望

本研究は、「ピボット」の動感様相の変動を明らかにしようとした。被験者は、「ピボット」を学習する過程で、「反逆身体」¹⁴⁾と対峙しながら、“軸感覚”を発生・変化させ、「ピボット」を高められた（金子, 2007）。これは「よりよい」動きを志向することによって可能となった活動である。つまり、被験者は「ピボット」の学習を通して、「運動の基礎」となる「運動感覚能力」のう

ちの自己観察力を高められたと言えよう。

このように、系統的段階的観点から運動例を解釈することによって、「多様な動きをつくる運動（遊び）」のねらいがこれまで以上に達成されることになろう。本研究では、数人の被験者の動感様相の変動を明らかにすることに留まった。したがって、事例を増やしたさらなる技能プロセスの研究が、今後の課題として残されることになる。

文献

- 1) 文部科学省：“学校体育実技指導資料第7集「体づくり運動」(改訂版)(PDFファイル)”.
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1325499.htm（参照2012-11-01）, p.22
- 2) 上掲書1) p.76
- 3) 金子明友. わざの伝承, p.2, 明和出版, 2010
- 4) 文部科学省. 小学校学習指導要領解説 体育編, p.24, 東洋館出版社, 2008
- 5) 前掲書3) p.250
- 6) 吉田茂・三木四郎編. 教師のための運動学 運動指導の実践理論, p.31, 大修館書店, 2010
- 7) 金子明友. 身体知の形成 下, 明和出版, 2005
- 8) 佐藤徹: 運動観察における自己観察活動の構造について. スポーツ運動学研究 12:13-24, 1999
- 9) ヴァイツゼッカー: 木村敏・浜中淑彦訳. ゲシュタルトクライス, p.42, みすず書房, 1975
- 10) 渡辺伸: 転ぶ(生活のなかの基礎的動き<特集>). 体育の科学 45: 198-201, 1995
- 11) クルト・マイネル: 金子明友訳. スポーツ運動学, pp.228-230, 大修館書店, 2002
- 12) 前掲書6) p.52
- 13) 前掲書11) p.231
- 14) 金子明友. 身体知の構造, p.294, 明和出版, 2007

(指導教員 上原三十三)